授業　②高等学校「家庭科」
高齢者疑似体験セット・妊婦疑似体験セットを使った実践例

実践例と解説

家庭科の目標（平成 30 年告示　高等学校学習指導要領）

生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1)人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的に捉え、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会との関わりについて理解を深め、家族・家庭、衣食住、消費や環境などについて、生活を主体的に営むために必要な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けようとする。

(2)家庭や地域及び社会における生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを科学的な根拠に基づいて論理的に表現するなど、生涯を見通して生活の課題を解決する力を養う。

(3)様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、地域社会に参画しようとするとともに、自分や家庭、地域の生活を主体的に創造しようとする実践的な態度を養う。

例えば『家庭基礎』では、次の内容のまとまりの中で、共生社会やインクルーシブについて考えることができそうです。

A　人の一生と家族・家庭及び福祉
⑶子供の生活と保育、⑷高齢期の生活と福祉、⑸共生社会と福祉
C　持続可能な消費生活・環境
⑶持続可能なライフスタイルと環境

このうち今回は、家庭基礎の「A　人の一生と家族・家庭及び福祉」の「⑸共生社会と福祉」の授業において、共生社会やインクルーシブについて考える実践例を紹介します。

⑸共生社会と福祉の内容
〈高等学校学習指導要領解説（平成 30 年告示）家庭編より〉
ア　生涯を通して家族・家庭の生活を支える福祉や社会的支援について理解すること。
イ　家庭や地域及び社会の一員としての自覚をもって共に支え合って生活することの重要性について考察すること。

内容のまとまりごとの評価規準例
〈「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　高等学校家庭より抜粋〉

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
生涯を通して家族・家庭の生活を支える福祉や社会的支援について	家庭や地域及び社会の一員としての自覚をもって共に支え合って生	様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、共生社会と福

理解している。	活することの重要性について問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを根拠に基づいて論理的に表現するなどして課題を解決する力を身に付けている。	祉について、課題の解決に主体的に取り組んだり、振り返って改善したりして、地域社会に参画しようとするとともに、自分や家庭、地域の生活の充実向上を図るために実践しようとしている。

高等学校学習指導要領解説（平成 30 年告示）家庭編より

高等学校学習指導要領解説では、「家庭総合」の「共生社会と福祉」について、「乳幼児期から高齢期までの人の一生を見通して、家族・家庭の生活課題を主体的に解決していくために必要な福祉や社会的支援について理解し、年齢や障害の有無に関わらず、それぞれの有する力を生かしながら共に支え合う社会を実現するために、家庭や地域がどうつながり、支え合ったらよいかについて実践的・体験的な学習活動の充実を図り、実感を伴って理解を深めることができるようにする。また、共に支え合う社会の一員として主体的に行動する意思決定能力を身に付け、家庭や地域及び社会の生活を創造していくための課題について考えることができるようにする。その際、多様なニーズをもった人々が、それぞれの個性を生かしながら共に支え合って生きる社会をつくるためにはどのようにつながり支え合ったらよいかを具体的な事例を通して考察することができるようにする」ということがねらいとして解説されています。

単元例

【単元名：「共生社会と福祉について考える」】

次	項目	内容（キーワード）
1	共生社会について知る	・共に支え合って生きる社会の考え方 ・社会福祉の基本的な理念 ・ノーマライゼーション
2	社会保障制度	・社会的制度と支え合いの構造 ・自助、共助、公助、互助 ・現代社会の現状
3	共に支え合って生きる	・バリアフリー、ユニバーサルデザイン ・社会の一員としてできること ・共に支え合う社会を実現するためにできること

発展

「3　共に支え合って生きる」の発展として…

体験活動を通し、社会を構成するすべての人々が、地域で当たり前に生活する「インクルーシブな社会」を実現させるためにできることについて考察する。

学習指導案（例）

高等学校 家庭・家庭総合 単元名「共生社会と福祉について考える」

「3−2 共に支え合って生きる ～体験を通してインクルーシブな社会を考えよう～」（第3次の2・3時間目）

≪本時のねらい≫

・自分の身近な地域における様々な人々との関わりや課題を理解する。（知・技）

・「インクルーシブな社会」の実現に向けて、共に支え合って生活することの重要性や、共生社会の実現に向けて自分にできることについて考察する。（思・判・表）（学）

POINT
社会が様々な人々で構成されていることや、一人ひとりにとっての多様なニーズに気付き、社会を構成するすべての人が地域で当たり前に生活する「インクルーシブな社会」を実現するために何ができるだろう…という視点を大切にしましょう。

≪本時の流れ≫（50 分×2コマ連続）

時間	主な学習活動	指導上の留意事項	資料・準備
： （10 分）	1. 本時の学習内容を知る 2. 本時の目標を知る。		
： （40 分）	3. 体験を通し、社会を構成する人々について考える。 ①疑似体験者、介助者、観察者を班ごとに交代で体験する。 ・疑似体験は、高齢者又は妊婦のどちらかを体験する。 ・観察者は、疑似体験者と介助者の様子を客観的に観察する。 ②体験の振返り ・各班での体験による気付きをワークシートにまとめる。 ・自分とは異なる他者の存在や人々のニーズにどのようなものがあるかを考え、まとめる。	・班の人数や数は、生徒数によって調整する。 ・体験時は、転倒等の事故のないよう留意する。	・高齢者疑似体験セット ・妊婦疑似体験セット
： （40 分）	4.「インクルーシブな社会」を考える 「インクルーシブな社会」が実現できているか、実現のために必要なこと、自分にできることについて、これまでの学習と関連付け付箋を使って各班で考察し、まとめる。 5. 発表 班ごとに、発表を行う。	・話合い時のルールを示す。	・模造紙 ・付箋 ・カラーペン
： （10 分）	6. まとめ 本時の学習内容を振り返り、教員のまとめを聞く。		

POINT
この体験活動では、「大変」「疲れる」などの感覚だけでなく、日常と異なる立場の体験から、普段気付きにくい「多様なニーズ」について気付けると良いです！

POINT
「否定しない」「全員が意見を出す」などの話合いルールを事前に示しましょう。付箋等の利用により、可視化し、意見が出しやすい方法を工夫しましょう。

POINT
学習活動４では、これまでの学習と関連付けられるよう、キーワードを抽出し、話合いを促すことも良いでしょう。生徒から上がる様々な意見を、肯定的に受け止めましょう。
「まとめ」では、「社会は多様な人々で構成されており、自分自身もその一人であること」への気付きや理解を育みましょう。一人ひとりが「インクルーシブな社会」の実現に向けて、本時のように考え続けていくことが大切です。

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	・共生社会の実現に向けた現代社会の状況について理解している。	・インクルーシブな社会の実現に向けて必要なことを考察し、表現している。	・これまでの学び、体験活動、自他の意見を関連付け、自分にできることを考えようとしている。